

令和4年度 公立小松大学入学者選抜試験
一般入試（中期日程）試験問題

小 論 文

【国際文化交流学部】
国際文化交流学科

（注意事項）

- 1 問題用紙は指示があるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は本文4ページです。答案用紙は2枚です。
- 3 答案用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 答えはすべて答案用紙の指定のところに、横書きで記入しなさい。
- 5 アルファベット文字や数字は、1マスに1字で記入しなさい。
- 6 字数制限のある解答については、句読点を1字と数えること。
- 7 試験終了後、問題用紙と下書き用紙は持ち帰ってください。

I. 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

著作権の関係上非公表としております

(「小林秀雄論」)

現代人は情報を取り入れることに忙しく、不可視なものを「よむ」ことを忘れ、ひたすら多くのことについて知ろうとしている。「よむ」とは、単に文字を追うことではなく、むしろ、越知のいう「低い」、「空気の濃密な場所」へ赴き、言葉の奥にひそむ意味

を発見することではないだろうか。

空気は目に見えない。しかし、私たちは全身でその存在を感じている。「よむ」ときも目や頭だけでなく全身を開放して言葉に向き合わなくてはならない。

(C) 読むことは、書くことに勝るとも劣らない創造的な営みである。 作品を書くのは書き手の役割だが、完成へと近づけるのは読者の役目である。

作品は、作者のものではない。書き終わった地点から書き手の手を離れてゆく。言葉は、書かただけでは未完成で、読まれることによって結実する。読まれることによるのみ、魂に語りかける無形の言葉になって世に放たれる。読み手は、書き手とは異なる視座から作品を読み、何かを創造している。書き手は、自分が何を書いたか、作品の全貌を知らない。それを知るのはいつも、読み手の役割なのである。

(出典：若松英輔著『悲しみの秘義』ナナロク社、2015年、18-22頁。なお本文中の漢字に付されたふりがなはすべて表示を略した。)

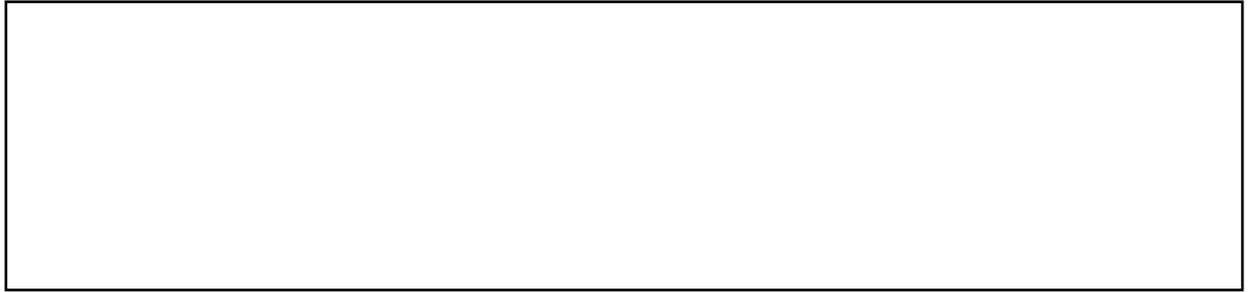
[問1] 下線部(A)で、「「よむ」という営みは、文字を追うこととは限らない。」と書かれている。では、「よむ」とはどのようなことか。文中から、端的に表現している箇所を抜き出して、20字以内で答えなさい。

[問2] 下線部(B)に関して、なぜそのようなことが起こると筆者は考えているか。本文を踏まえ、150字以内で説明しなさい。

[問3] 下線部(C)に関して、本文全体を踏まえたうえで、なぜ読むことは創造的な営みなのか、また、創造的に読むということはどのようなことかについて、400字以内で自分の考えを述べなさい。

Ⅱ. 次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

著作権の関係上非公表としております



(出典：内田由紀子著『これからの幸福について 文化的幸福観のすすめ』、新曜社、2020年、144-145頁)

[問1] 下線部(A)に関して、筆者はなぜ「長期的で広い視点に立った関係思考が必要になる」と考えているのか、その理由を100字以内で述べなさい。

[問2] 下線部(B)に関して、筆者は「幸福を支える要件」と「幸福を感じる力」の関係性についてどのように考えているか、150字以内で述べなさい。

[問3] 下線部(C)に関して、あなた自身が考える「地域固有な自然や文化に基づいた持続可能な社会づくり」とはどのようなものか、300字以内で述べなさい。